

ある。

今年の発見當時は光輝が非常に弱かつたが其の後、太陽へも、地球へも、近づいて来る

1896 e=1896 V	1896年 9月 4日 発見 (第一週期星)
1898 g=1898 V	1898年 6月 16日 同
1899 e=1899 V	1899年 9月 19日 同
1900 a=1900 I	1900年 1月 31日 同
1900 c=1900 III	1900年 12月 20日 同 (第二週期星)
1902 d=1903 II	19 2年 12月 2日 同
1903 a=1903 I	1903年 1月 15日 同
1904 d=1604 II	1904年 12月 17日 同
1905 a=1905 III	1905年 3月 26日 同
1905 c=1906 I	1905年 12月 6日 同
1907 a=1907 I	1907年 3月 9日 同
1907 c=1907 III	1907年 6月 1日 同

さて又、去る十一月八日、東京に於いて汎太平洋學術會議開會中に、コペンハーゲンより送した電報に據れば、去る十一月四日の夜十二時近く、スペイン國バルセロナ市フアラ天文臺長コマスソラ I (Comas Sola) 氏は

から、幾らか大きい光になるだらう。因みに、シヤコピニが発見した十二箇の彗星は

赤經 2時57分 (毎日15'づつ増加)
赤緯 6度31分(北) (同 6' 南へ)
の天に光度 12.0 級の一彗星を農民見たさいふ。之れは 1926 f であるが、多分、新彗星であるう。

雜 報

●**山本博士の新著成る** 山本一清博士が昨年歸朝早々、東京新光社の依頼を受けて、萬有科學大系の第一巻のために執筆せられた「天體と宇宙」は去る七月末いよいよ美装して發行せられた。全部で 338 頁、總アート紙で、366 個の寫眞や圖畫と、無数の表とを入れ、内容は皆 1926 年五月現在の最も新しい材料を用ゐてゐる。今は叢書の一部であるが來年あたり單行本となるであらう。

●**トルコで新曆採用** ナウエン無線局の報道によれば、アンゴラのトルコ國民議會は來(1927)年一月一日からキリスト教曆即ち現今世界一般にひろく行はれるグレゴリ曆を採用することを決議した。現在の回教曆では去る七月十二日から紀元第 1345 年が始まつたわけであるが、上記の改曆により、來年一月一日からは回教曆としては第 1346 年が始まることとなる。故に第 1345 年は百七十三日目で終るのである。

●**中村氏の反射鏡製作法** 中村要氏が去る七月以來の科學畫報に連載されつゝあ

る反射鏡製作法は一般讀書界及びアマチニア天文家の間に大きなセンセーションを起してゐる。

●「ヘリウムと太陽熱」への追補

七月號の天界にのせて頂いたあの拙文は私が大正十三年十一月一日支部例會で講演せるものですから文中「昨年の初め頃」とあるのは勿論大正十二年の初めの意であります。それから水銀原子の遊星電子を一個除くま金の原子になることを述べましたが嚴密に云へば遊星電子を一個除いただけでは金の原子にならないで單にイオン化せられた水銀の原子を得ます。遊星電子一個を除くと同時に其の原子核の電氣量をも變化させて原子を電氣的に中和した状態にして始めて金の原子が得られます。最近アムステルダム大學のスミツト氏は鉛を變じタリウム及水銀を得る事を報じて居ります。長岡博士の水銀より金への變換を是れに結びつけるに往時のアルケミストの夢は實現されたことになります。(札幌 米田勝彦)